わたしたちの上山紀行

Erinnerungen an Kaminoyama

▲8月9日、上山からの旅立ちを前に…

7月26日から8月9日までの15日間、海外友好都市であるドイツ・ドナウエッシンゲン市から学生訪問団11人が本市を訪れました。友好都市の締結後、まもなく始まった学生交流も今年で13年目。上山が学生訪問団を受け入れるのは7回目になります。滞在期間中、学生たちは市内の家庭にホームステイし、日本の文化や生活習慣に触れました。

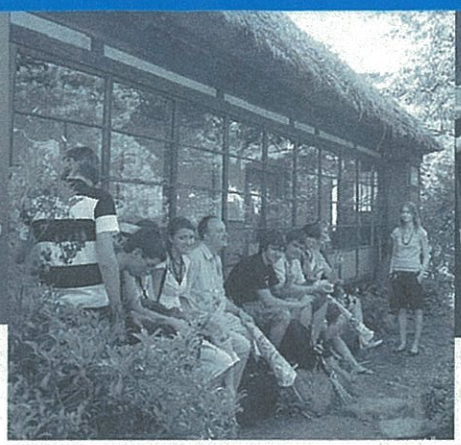
彼らが見て、聞いて、触れたもの。交流を深めた人びとのかけがえのない時間。そして、この体験から彼らはどんなことを思ったのか。彼らの滞在の様子と心の動きを追いました。

7月26日 ホストファミリーと対面！ゆかたに着替えてキャンドルナイトへ♪

ドイツからパリを経由し、成田まで空路約十四時間。さらに山形新幹線に乗り継ぎ約三時間。やっとたどり着いた上山は連日の夏日。旅の疲れとホストファミリーとの対面を前にした緊張のせいか、表情にやや固さが見える。その後、市役所正面広場に集まり、歓迎交流会に参加。混声合唱団「フロイデ」の歌声や日独友好協会からゆかたをプ

学生訪問団のみなさん
【前列左から】マリーナ・クリスティックさん、リザ・プライスさん、クラウディア・シュミットコタさん、メラニー・マーティンさん、スヴェアアニカ・シェンクさん、エファ・ブラウロックさん【後列左から】アートゥア・マイヤーさん、フィリップ・ドゥーラさん、コンスタンティン・オットゥさん、マリオ・モスバッハーさん(引率者)、ヴァレンティン・フォン・ヴィッツレーベンさん

▲引率のマリオさんから市に手渡された絵。かつてドナウエッシンゲン市が大火にみまわれた時の様子を描いたもの



▲上山城の足湯でハイ、チーズ！「Nice, feet onsen！（足湯、気持ち良かった～！）」
◀武家屋敷の庭先でひと休み

レゼントされ、満面の笑み。

さっそくゆかた（男子は甚平）に着替えて「キャンドルナイトinかみのやま」へお出かけ。イベントのオープニングを飾る「ゆかたファッションショー」のゲストとしてステージに登場。会場の観客から歓声と拍手が起きた。

学生たちは初めて見る日本の祭りに興奮気味。特に打ち上げ花火には「日本の花火ってすごいね～」と感心しきり。長旅の疲れも吹き飛んだ様子だった。

7月28日 ひまわり迷路を楽しんだあとは上山城や武家屋敷、茂吉記念館を見学

初めにヴェンテンガルテンのひまわり迷路のオープニングセレモニーに参加。開花している花は少なかったが、背の高い彼らに負けないほど伸びたひまわり迷路にさっそくチャレンジし、見事ゴール！おみやげにひまわりをもらってご満悦の様子。

午後からは上山城や武家屋敷、斎藤茂吉記念館を見学。上山の歴史や文化に触れ、とても興味深そうだった。多くの学生が、途中でつかった足湯を気に入ったようだ。

7月30日 あいにくの雨模様…でもZAOたいらぐらでエクササイズ！

市長へ表敬訪問のため市役所へ。ドナウエッシンゲン市のフライ大市長から預かってきた絵と学生たちの歌を横戸市長へプレゼントした後、楽しみにしていた蔵王のお釜見学へ出発。

ところが、あいにくの雨模様で眺めることができず、とても残念がっていた。

気を取り直してZAOたいらぐらを訪問。体育館やトレーニング室をちょっぴり体験させてもらうことに…。するとバスケットボールを楽しんだり、ランニングマシーンで走ったりして大はしゃぎ！もともとスポーツをしている学生が多く、気分転換と互いのコミュニケーションの場になった。街中に戻り、疲れて動けないのではと思っていたら、心配無用の元気ぶり。

「このキャラクターのシャツ、いとこへのおみやげにしようかな～」とショッピングに夢中になっていた。

7月31日 園児と遊んで楽しい～!! 和菓子づくりに旅館に宿泊と日本を満喫

しらさぎ保育園に到着した一行は、年長児の子どもたちと交流。「どんな食べ物が好き？」といった園児たちの質問に答えたり、童謡「ちょうちょ」を日本語とドイツ語で歌ったり、いす取りゲームやフォークダンスをしたりして、楽しい時間を過ごした。

園児たちはドイツから来たお兄さん、お姉さんに話しかけたり手を引いて遊びに誘ったりと積極的。言葉の壁もお構いなし。学生たちは園児たちのかわいらしさと無邪気さに感激しながら、自然と遊びの輪の中に溶け込んでいた。

給食を一緒に食べ終わるとさよならの時間に。学生も、園児たちも「え～っ、もう帰るの～？」と名残惜しそう。「また会おうね」と手と手を合わせる光景が印象に残った。

この後、和菓子作りにチャレンジしたり、旅館に宿泊した。温泉に何度もつかったり、花火を楽しんだり、日本の文化・風情を満喫していた。

▼和菓子作りに挑戦中。「こんな感じでいいのかな？」「そうそう、上手！」

▶（右上）みんなでいす取りゲーム！（右下）メニューは、野菜たっぷりのメンチカツにシーザースサラダ
▼「また会おうね！」元気にハイタッチ！

▲花笠祭り２日目に参加。練習時間はほとんどなし
▶ホストファミリーも一緒だから心強かったのかも！

8月4日 上山の花笠まつりに参加 踊りもゆかたもきまってるでしょ！

訪問団としての行動が久しぶりとなったこの日、学生たちはそろいの法被・ゆかた姿で「踊る花笠・仮装花笠祭り」の列に加わった。

初めは少し戸惑い気味だったけど、ホストファミリーと一緒に踊っているうち、立派な踊り子に変身。「花笠踊りはすごく楽しいよ」と汗を拭った。

踊りの後は温泉につかり、「ちょっと熱いけどリラックスするね」とすっかりその魅力に目覚めたようだ。

8月5日 ドイツと日本、社会や文化の違いにフムフム…なるほど。

商工会館でドイツと日本の文化・習慣を紹介しあうワークショップを開いた。学生たちは◇伝統行事◇交通機関◇団体・協会・連盟などの活動（スポーツや文化活動などを行うもの）の3つのテーマについてそれぞれ発表。

交通機関の発表で、道路の通行方法について紹介した時、ホストファミリーから質問があった。「ロータリー式の交差点でどうやって右折したり、左折したりするの？」その答えを学生たちが実演。ロータリー役の二人の周りを自動車役の学生たちが交差点に入ってから出るまでを説明してみせた。「なるほどね」とうなずく参加者たち。子どもの多い住宅地域では制限速度が時速5kmという制度にも関心が集まった。

日本についても、まつりやサークル活動、交通制度を紹介してお互いの社会や文化の違いを学びあった。

8月7日 高校生・中学生と交流 書道に琴、茶道、柔道 日本の文化ってスゴイ！

公式日程では最後の訪問。午前中は上山明新館高校を訪れた。同世代の生徒たちとの交流は書道からスタート。自分の名前を漢字に置き換えた手本を見ながら、真似して書いてみた。ふむ、なかなか上手かも。ロールケーキ作りをはさんで、琴を弾いてみたり、茶道をたしなんだりと、和の風情に触れた。

午後は南中学校に移動。市内の中学校4校で構成する中学生サミットのメンバーと意見交換。柔道にチャレンジ。「礼に始まり礼の終わる」スポーツ。まずは正座し、深く礼をすることからスタート。自分の身を守る受身、そして寝技と投げ技の基礎を学習。練習相手になってくれた中学生たちは、「体が細いのに、↖

▲「ハープみたい、ステキな音」と琴の音色を楽しんでいた

▼「お見事！」と声をかけたくなるような大外刈りに先生も「上手いなぁ」

ホストファミリーの日 日本の家族たちとの時間 過ごし方のあれこれ

▲ホストファミリー主催のパーティー。日本語で家族を紹介するために準備してきたうちわ。何を話すか注目…

訪問団としての活動をこなす一方で、「ホストファミリーの日」がある。ホストファミリーと買い物に行ったり、遊園地や海、花火などに連れて行ってもらったりと過ごし方もいろいろ。「毎晩、いろんなことを話してた」という子もいた。学生たちは家族の一員になったような気分。「とても嬉しかった。日本の家族に心から感謝している」と話した。

また、ホストファミリーの呼びかけで、バーベキューやパーティを開き、みんなで交流。そのせいか「この学生のファミリーはこの人だったかしら？」と間違えてしまいそうなほど、他のファミリーとも仲良しだった。

ちなみに、学生たちは、大のカラオケ好き。ドイツには少ないから日本に行ったら必ず行きたいところだと言う。時間が合えば日本の兄弟たちとカラオケへ♪「パーティーで披露する歌を練習したの！」ってどれだけ練習したの!?

わたしたちの上山紀行
Erinnerungen an Kaminoyama

▲中学生の見守る中、河原ですいか割り。うまく割れたかな？

学生たちが学んだ日独文化の違い

ホストファミリーと過ごした中で、学生たちが日本の家庭や生活習慣について気づいたことがいくつかある。

まず、食事。箸を使うことはもちろんだが、三度の食事に温かい品が入っていて、朝食に魚が出ること。ドイツでは朝食はコーンフレークと牛乳、果物やジャムといったものが多い。昼や夜はソーセージ、じゃがいもなどが中心の食事。日本の食材やメニューの多さに驚いていた。苦手なものもあったようだが、「ホストファミリーがいろいろと親切に気遣ってくれた」と感謝する言葉が見受けられた。

そして家族形態。祖父母との同居がほとんどないドイツから見れば、日本の家（特に上山の場合）に三世代以上同居しているのはとても珍しいこと。その上で「これは家族が仲良く一緒にいられて、とても素晴らしいことだし、大切なことだと思う」と語ってくれた。日本人のわたしたちも大切に受け止めたい言葉だろう。

力が強くてびっくり」と学生たちの意外な強さに驚き！特に上手に投げ技をかけられるようになった男子学生たちは柔道に夢中になっていた。

最後は河原ですいか割り。目隠しされて、周りの声と自分の勘を頼りに「えーい!!」「こっちかな？」と棒を下ろす。「違うよ～」「そっちじゃない」。上山に来て、何度もおいしいスイカを食べたけど、一番忘れられないスイカだったな。

わたしたちの旅もあとわずか…。

8月9日

お別れの朝…みんな本当にアリガトウ！

朝8時半。さわやかな夏空の下、東京行きのホームは、たくさんの笑顔と涙であふれかえっていた。

大切な思い出ができた喜びとともに、まるで本物の親子や兄弟に思えるほど親交を深めたホストファミリーや知り合った人々との別れのつらさが胸に沸き起こる。この自然な感情に、文化や言葉の壁などないのだろう。

何度も抱きしめあったり、手を握ったり。そして発車のベルが鳴り響く寸前まで「ありがとう」「また会おうね」を繰り返していた。

学生たちを乗せた新幹線が去ったホーム。そこには、日本の家族として子どもを送り出し、ほっと安心しながらも、どこか寂しげな表情のホストファミリーの姿があった。

でも、寂しがっていても始まらない。ここからが本当の交流の始まり。遠くにいても、なかなか会えなくても、互いを思いやる心があればきっと大丈夫。なぜなら、わたしたちは同じ空の下に生きる「家族」なのだから…。

▲日の丸の旗に名前を書いてもらっていたアートゥアとコンスタンティン、彼らの宝物だ

【結びに…】

彼らが抱いた日本、上山の印象。共通しているのは「礼儀を重んじながらも、親しみやすく、親切で、よそから来た人を丁重にもてなしてくれる」人が多いと感じていることだった。言葉・文化・習慣・生き方・精神…。異なるものが多くても、わかちあい、共有する気持ちがあればすべてを乗り越え、友情でつながることができる。

同時にわたしたちの文化を振り返る素晴らしい機会となる。ホストファミリーや学生たちと知り合った人たちは、多かれ少なかれ、そう思ったのではないだろうか。

上山が生んだ歌人・斎藤茂吉がドイツ留学の間に訪れた地、ドナウエッシンゲン。茂吉を通して結ばれた友好の絆（きずな）は、訪れる人の往来を重ねて、さらに確かなものになっていく。